

月刊

みんぱく

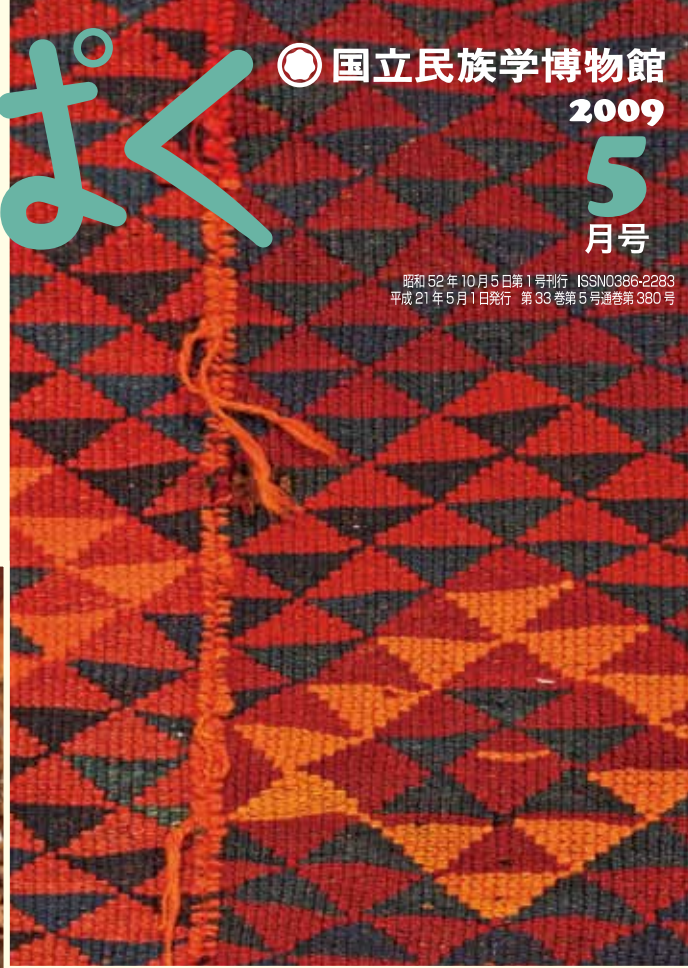
国立民族学博物館

2009

5
月号

昭和52年10月5日第1号発行 ISSN0386-2283
平成21年5月1日発行 第33巻第5号通巻第380号

特集◎
常設展示リニューアル
〈西アジア〉



チベット犬事情

ゆめまくら ぼく
夢枕 獏

何

度かチベットに出かけたことがあるのだが、いつも恐い想いをするのが犬である。

チャンタン高原をジープで走っていると、はるか遠くに遊牧民のテントが見える。そこから、豆つぶのような小さな黒いものが走ってくるのが見える。これが、なんと遊牧民の飼っている犬なのである。それも、車めがけて真っ直に走ってくるのではない。数分後に車が通過するであろうという地点を目指して、走ってくるのだ。

車と合流すると、狂ったように吠えながら、後を追ってくる。時に車と並走し、車のタイヤに噛みつかんばかりの勢いで追ってくるのである。

車が村に着く。カメラを抱えて、村の中を歩いていると、いきなり放し飼いの犬に吠えかけられて、ほとんど噛みつか

れそうになったこともある。

明治の頃、チベットを旅した日本人河口慧海もまた犬には難儀している。遊牧民のほとんどが犬を飼っているからだ。遊牧民のテントを訪ねるのも生命がけで、慧海は持っていた杖で、寄ってくる犬をあしらいつつながら旅をした。それでも犬に噛まれていた。

しばらく前のデータで恐縮だが、日本人で犬に噛まれて、狂犬病で死ぬ人が、年に何人かいるらしい。ほくはこれを、チベットからネパールへ抜けて日本へ帰るおり、カトマンズで聞いた。

「それ、みんなチベットやネパール、つまり海外で犬に噛まれた人たちなんです」と、この話をしてくれた通訳の人は言ったのである。

チベットの犬は、痩せ細っていて、昼に見ると元気がない。しかし、夜になっ

た途端おいおいこれがおまえの本性かよというくらい獠猛になって、吠え、走りまわり、外国人などがうろうろしている

と襲ってくるのである。

チベットの西にある大きな塩湖のほとりの村で、夜半にトイレに行きたくなり、外のトイレに行ったのだが、犬の群にトイレを囲まれて、外に出られなくなってしまったことがある。屋根のない壁だけのトイレであったので、なんとか、壁一つまり塀の上に登ってそこで夜明かしをした。ほくが、壁の上に逃げたとたん入ってきた犬が、ほくの出したまだ温かいウンチを眼の前で食べていったのには、思わず感動。

夜が明けて、燃料のヤクの糞を拾いに来たおばあちゃんに、塀の上から飛びつくようにして駆け寄り、やっと脱出したのでした。

- 1 エッセイ 世界へ●世界から
チベット犬事情
夢枕 獏
- 2 特集 常設展示リニューアル
西アジア展示が生まれ変わりました
西アジア常設展示改修にあたって…… 西尾 哲夫
ペルシアの市場にて…… 高山 龍三
旅する楽器…… 水野 信男
哀悼の〈かたち〉…… 山岸 智子
刺繍から想うパレスチナの故郷…… 錦田 愛子
- 8 モノ・グラフ
社会と時代が織りなした
ナシ族画家の出現
横山 廣子
- 10 地球ミュージアム紀行
神奈川県立地球市民かながわプラザ・あーすぶらざ
手づくりの温かさで現代世界を伝え、考える
林 勲男
- 11 表紙モノ語り
ラクダの道具と装具
上羽 陽子
- 12 みんぱくインフォメーション
- 14 万国津々浦々
バドウィンのテントで明かした夜
山中 由里子
- 15 時論 新論 理想論
俳優デヴィッド・ガルピリルのこと
松山 利夫
- 16 多文化をささえる人びと
子どもたちの小世界
ブラジル人学校のいま
庄司 博史
- 18 生きもの博物誌
マオ・グアは母の味
宮脇 千絵
- 20 歳時世相篇
曳山と風流 春の祭りの民主主義
笹原 亮二
- 22 フィールドで考える
結婚相手を選ぶ術
松尾 瑞穂

- 24 みんぱくウィークエンド・サロン
研究者と話そう
次号予告・編集後記

1951年、神奈川県生まれ。東海大学文学部日本文学科卒。77年に作家活動を開始。「キマイラ」、「サイコ・ダイバー」、「闇狩り師」、「餓狼伝」、「陰陽師」などのシリーズで読者の支持を集める。89年、『上弦の月を食べる獅子』で第10回日本SF大賞受賞。98年、『神々の山嶺』で第11回柴田錬三郎賞受賞。近年の著作に『沙門空海 唐の国にて鬼と宴す』、『シナン』、『東天の獅子』などがある。

西アジア展示が

生まれ変わりました

غرب آسيا
 西亜
 西亞
 West Asia
 Asie de l'Ouest
 Западная Азия
 Asia occidental
 서아시아

開館二〇年を機に民博は、展示も変革の時を迎えており、六か年計画で常設展示場の改修を進めている。その第一弾として、アフリカと西アジア展示を一新した。まず今月号で紹介するのは、生まれ変わった西アジア展示。「信仰」、「砂漠のくらし」、「パレスチナ・ディアスポラ」、「日本人と中東」、「音文化とポップカルチャー」という五つの軸を中心に再構成され、旧展示場でおなじみのあの家宝、収蔵庫に眠っていた珍しい資料、近年収集された真新しい品々が、新しい舞台にお目見えした



常設展示改修にあたって

にしお 哲夫

民博 民族文化研究部

専門は言語学、アラブ研究。現在アラビアンナイトの形成とオリエンタリズムをめぐる研究に従事。近著に『アラビアンナイト—文明のはざまに生まれた物語』（岩波新書）。

西アジアは四大文明の二つまでを
 はぐくみ、ユダヤ教、キリスト教、
 イスラム教（イスラーム）という重
 要な宗教をうみだしました。しかし
 ながら日本では、西アジアあるいは
 中東世界という言葉からラクダやア
 ラビアンナイトを連想する人が多い
 のではないのでしょうか。近代以降の
 日本人は、欧米というフィルターを
 とおして西アジアを見てきました。
 ラクダやアラビアンナイトのイメー
 ジは、このフィルターをとおして定

着してきたといえるでしょう。

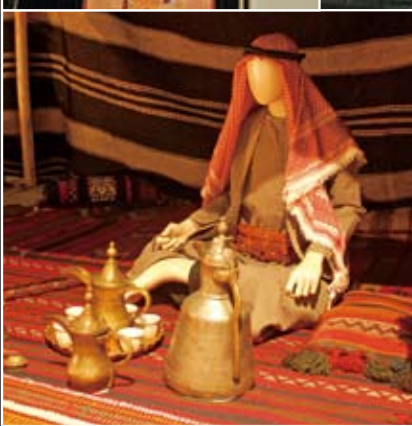
今回のリニューアルでは、西アジ
 アという地域を単独でとらえるので
 はなく、この地域が、他の地域と歴
 史的・文化的にどのように関係しあ
 ってきたのか、どのような影響をあ
 たえあっているのか、さらには地球
 規模の変動の中でどのように変容し
 ていくのかを中心に、いくつかのサ
 ブテーマを設定してみました。

イスラームにもとづく 多彩な文化

一部の例外はありますが、西アジ
 アは乾燥気候地帯に属しており、広
 大な砂漠におおわれています。砂漠
 の舟とも称されるラクダを飼養する
 遊牧民たちは、砂漠を舞台とする豊
 かな生活文化をはぐくんできました。

砂漠のもつ特性は独自の自然観や人
 間観の発展をうながすことになり、
 やがてはイスラーム文化の基盤にも
 影響をあたえたのです。

西アジアで誕生したユダヤ教、キ
 リスト教、イスラームは、人類史に
 多大な影響をおよぼしてきました。
 西アジアの各地ではさまざまな文化
 が発展しましたが、七世紀にアラビ
 ア半島で誕生したイスラームは西ア
 ジアをおおい、やがてはイスラーム
 世界が形成されることになりました。
 イスラーム世界では宗教上のしき
 りにそったさまざまな文化が生ま
 れ、コーラン（クルアーン）の言葉
 であるアラビア文字を美しく書くた
 めのイスラーム書道が発展しました。



新しい伝統と
 民族文化にそって

西アジアでは長らく三宗教が共存
 してきましたが、近代以降に世界シ
 ステムが組み替えられると状況が一
 変し、なかでもイスラエルの建国は
 深刻な問題を残すことになりました。
 イスラエル建国によって土地を失い、
 各地に離散したパレスチナ人のあい
 だでは、伝統的な女性用衣装に代表
 される民族文化が再認識されるよう
 になっています。

グローバル化のもとで民衆文化も
 大きく変容してきました。西アジア
 の各地では、生活の場面ごとに豊か
 な音文化が受けつがれており、世界
 的なブームとなったベリーダンスも
 そのひとつです。アラブ世界の民俗
 芸能であったベリーダンスは、世界
 に輸出されたことで質的な変化を遂
 げ、これを伝統芸能として再評価し
 ようという動きも出てきました。西
 アジアでは保守と世俗がからみあい
 ながら、日々新しい伝統がつくられ
 ているのです。



ペルシアの市場にて

兜との再会

二〇〇八年秋、特別展オープニングの日、山中由里子さんからの依頼で、収蔵庫に入った。西アジア展示のリニューアルのため、新たに展示予定のイランの兜に会うためである。それは今から四〇年前、私が収集したものだといふのだ。すっかり忘れていたが、そういえばたしかに私が集めたものだろう。

岡本太郎氏の構想で、太陽の塔の地下に、「根源の世界」を表現するための、仮面と神像その他民具を、世界中から集めるプロジェクトがつくられた。泉靖一、梅棹忠夫両先生のもと、若手研究者によって構成されたのが、EEMすなわち「日本万国博覧会世界民族資料調査収集団」である。一九六九年一月、西アジア南アジアを担当した私は、まずイランへ飛んだ。二か月半の間、五か国、二四の都市をまわり、民族資料の買いつけ、梱包、発送など一人でやった。まず町に着くと、博物館へ行った。人に聞いたりして情報を集める。

たしか古いバザールの骨董屋で兜、錫杖、斧を買った。ノートには「イミテーション」と書いてあるので、古いものではない。ノック、トルコマンの首飾り、ピストル、ナイフ、火薬入れといっしょに八点六五〇〇リアルで買っている。その後シーラーズに飛び、ペルシア帝国の首都ベルセポリスを見学、テヘランに戻り、車で雪のエルブルズ山脈を越え、ラムサールで一泊、カスピ海沿岸を廻った。

たかやまりゅうせう
高山龍二
京都文教大学元教授
大阪市立大学大学院修了。東京工業大学、東海大学、大阪工業大学教授などを歴任。専攻はヒマラヤ・チベットの民族誌、アジア文明論。近年は河口慧海研究に傾倒している。

骨董屋や物産展示場など、物色、買いつけ、資料についてのデータを聞きとる。まあそういう行動の連続だった。イランのイスファハンは京都にも似た古い町だ。車をチャーターして、モスク、広場、バザールを見てまわり、郊外のゾロアスター寺院の廃墟に登ったり、アルメニア派の教会を見たりした。買い物には時間がかかった。ずいぶん交渉したが、言い値の七五パーセントぐらいにしかならない。道を屋根で覆った古いバザール、歩いていると感じないが、じつとしてると寒い。



バザールの裏通り、職人がハンマーで鍋を叩いてつくっていた(イスファハン 1969年冬)

たしか古いバザールの骨董屋で兜、錫杖、斧を買った。ノートには「イミテーション」と書いてあるので、古いものではない。ノック、トルコマンの首飾り、ピストル、ナイフ、火薬入れといっしょに八点六五〇〇リアルで買っている。

その後シーラーズに飛び、ペルシア帝国の首都ベルセポリスを見学、テヘランに戻り、車で雪のエルブルズ山脈を越え、ラムサールで一泊、カスピ海沿岸を廻った。

収集団余話

『EEM』第一章「収集団」から(博物館へ)に梅棹先生は、私が受けた新聞記者のインタビューを紹介されている。ラウルピンディでパキスタン・タイムズの記者が取材に来た。とくに民具については、人間の智慧の展示であり、根源の世界を表現するものだというと、まったくユニークだと言ってくれた。ついでEEMのこと、口がすべて民族学博物館設立計画まで言ってしまう。先生が書いておられるように、当時博物館のことは関係者の暗黙の了解だった。だからおしかりを受けるかもしれないと手紙に書いたのだ。「古民具の展示 日本 専門家収集に」という記事が翌日の同紙に載った。



刷新した西アジア展示の一面。中央下が兜



バザールのなかの通り、両側に骨董屋が並んでいる。天窓から光が射しこんでいるが、冬は寒い(イスファハン 1969年冬)



バザールのなかの金のアクセサリー屋、ウインドウ・ケースを覗いている人たち(イスファハン 1969年冬)

旅する楽器

古代のエジプトやメソポタミアの王墓に彫られたレリーフには、さまざまな楽器が登場する。そこでは楽器は、演奏する人物像とともに描かれていて、楽器の形状はもろろん、人がその楽器をどのように奏でたかも、観察できる。またレリーフのほかに、古代遺跡からは楽器そのものも出土している。メソポタミアのウ



ウル王墓出土の竖琴(イラク国立博物館蔵)

水野信男

みずの のぶお
兵庫教育大学名誉教授

東京芸術大学大学院修了。博士(文学)。兵庫教育大学教授、国立民族学博物館教授(併任)などを歴任。専攻は民族音楽学。中東を軸に人と音の多様なかかわりを探求している。

ル王墓(紀元前二五世紀)で発見された竖琴は、いまは、イラク国立博物館や大英博物館に収蔵されているが、それらはどれも精巧かつ華麗で、鑑賞者の目をあきさせない。

このように途方もなく古い時代に生まれた楽器は、文明の波にのり、周辺地域に拡散し、農村や都市の人口とともに育てられ、洗練されていった。同時にそれらは、西アジア文化圏をこえて、ひろくユーラシア大陸にむけて旅だつた。すなわち、歴史の経緯とともに、世界各地に縦横に展開したのである。

サントウールは東漸して中国の洋琴になり、それは琉球を経て日本本土にも伝来した。一方、このサントウールやカーヌーンなど、ギター系の楽器は、西漸して、ハンガリーのチンバロム、西欧のダルシマー、チェンバロ、ひいてはピアノへと変容した。リュート系のウード(ペルシヤ語ではバルバット)も、やはり東漸して中国や日本の琵琶に、西漸し

てリュートやギターに姿を変えた。このほかにもイランのセタールは、中国の三絃、ついで日本の三味線に、また、葦笛のナーイは、東アジアの竹製の笛(尺八など)に変身した。これらの諸楽器は、たとえその伝播のルートやプロセスが、ときにはつきりしないとしても、その源流の一端が、ここ中東の地にあることだけは、まちがいない。

このほど西アジア展示場に新たに登場した「中東地域の楽器」は、いずれも現代社会を舞台に、現役で活躍中のものばかりである。これら一つひとつの楽器は、たとえばリラ系のシムシミアが、あのメソポタミアの竖琴をほうふつさせるように、それ自体、過去の伝統を忠実に投影しながら、人びとの暮らしに息づき、多彩な音を響かせている。

楽器をとおして文化・文明の伝播と系譜を紹介する



哀悼のへかたち

やまぎし ともこ
山岸 智子

明治大学准教授

専門はイラン地域研究、文化論。最近ではシリア派ネットワークや、イスラームとグローバル化といったテーマへの関心を高めている。

シドニーのモスクを訪問したときのこと、一緒に説明を受けていたヒンドゥーと思しきインド人一行は、「ところでアーシューラーはどんな意味があるのか？」と尋ね、トルコ系のモスク管理者を困惑させていた。それほどまでにヒジュラ暦ムハッラム月一〇日（アーシューラー）におこなうシリア派ムスリムの哀悼行事は見た人の耳目を驚かす。シリア派信徒はカルバラでヒジュラ暦六一年に悲劇的に殺された第



図2 コーヒーハウス絵画モハンマド・モダッベル作「カルバラの悲劇」[ヒジュラ暦1325年/西暦1907年]（レザー・アッパースィー美術館所蔵）

図1 カズヴィーンの哀悼行事施設に飾ってあったアリー・アクバル(第3代イマームの息子)の絵 (19世紀?)



三代指導者（イマーム）を偲び、ムハッラム月一日から一〇日まで、集会や街頭行進で、号泣したり、胸を叩いたり、あるいはわが身を刃物で傷つけて指導者の名前を叫んだりする。集会では韻文・散文でカルバラでの出来事を朗詠し語るが、演劇形式をとることもある。タアズィエ（殉教劇）である。一九世紀のテヘランでは国立タアズィエ劇場が建設され、王は外国人の賓客も招待して大がかりな哀悼集会を催し、

その舞台には最新の自動車や外国大使役なども登場させた。そこからアメリカの研究者にはタアズィエを「前衛的」と評価する者もいるが、私自身がタアズィエを見て前衛的だと思ったことは（残念ながら）ない。タアズィエの題材は一九世紀から二〇世紀にかけてカルバラの出来事のみならずイスラーム以前の歴史



図4 イラン現代ミニアチュール マフムード・ファルシュチャーン作「アーシューラーの夜」(テヘラン1976年)



図3 パハレーンの子ども用雑誌付録の「小さなフサイニー」(パハレーン2008年)



にまで及ぶようになった。こうしたタアズィエの小道具や関連の品を一新された常設展でじっくり見てほしい。なおカルバラの悲劇の絵画表現も無視できない。図1は、一九世紀の作と推定される絵で、顔の描き方にイスラーム陶器などにも共通する特徴が見出される。そして一九世紀後半からは大衆的な「コーヒーハウス絵画」が発展し、街角での殉教語りにも用いられた。(図2)

アーシューラーの際にかつがれる旗など、シリア派の哀悼行事に関連した品々を見ることができる

刺繍から想う パレスチナの故郷

にしきだ あいこ
錦田 愛子

早稲田大学イスラーム地域研究機構研究助手

総合研究大学院大学修了。文学博士。専門は中東地域研究で、ヨルダンやレバノンにおける離散パレスチナ人の帰属権と帰属意識について研究を続けている。



パレスチナの地理が特産品とともに描かれた刺繍 (林 博貴氏提供)

「アイアスポラ」として公開されることになった。

西アジア展示の中ほどに設けられた、色とりどりの刺繍ドレスのコーナーは、収集家ウィタード・カワール夫人によるコレクションである。彼女は現在ヨルダンに住むパレスチナ出身者だ。自宅の半地下を収蔵室にあてた膨大な収集品の一部を、民博は買い取った。

パレスチナ・ディアスポラ

それがこのたび「パレスチナ・デ

女性たちの間で受け継がれてきた技法だった。正確な起源をたどるのは困難だが、現存する最も古い刺繍は一九世紀初めの物である。それらはヨーロッパの旅行者や宣教師が持ち帰ったものであり、現在は欧米各国の博物館に収蔵されている。大英博

物館は一九六〇〜八〇年代にかけて、パレスチナの伝統衣装に関する調査をおこなった。中心となったのは研究員のシェイラ・ヴェイルだが、カワール夫人はその聞き取り調査にも協力をした。

アイデンティティとしての刺繍

「衣装は女性の、パスポートであり、着る者のアイデンティティを示す」。二〇年以上前のインタビュー記事で、彼女はそう述べている。農村部で発達した刺繍は、村ごとの特徴を示し、模様のパターンを見ればどこ出身か分かったという。村の手芸品だった刺繍は、後にパレスチナ文化を代表するナシヨナル・シンボルとなる。日常着として着られる機会は減ったものの、土産物としての役割は拡大しているからだ。外から来た観光客は、「パレスチナ土産」として刺繍製品を手にとることになる。その売場のひとつとして機能しているのが、エルサレムに店舗を構える「スンブラ」である。ここではパレスチナ自治区各地で活動するNGO



第一次インティファダ(民衆蜂起)期の刺繍は、イスラエルへの抵抗運動の高まりを表す

に対して、販路を提供している。ま

た日本でも複数のNGOが収入創出事業として製品を輸入している。日本国際ボランティアセンター(JVC)や、パレスチナ子どものキャンペーンはそのひとつだ。刺繍製品の作製は、占領下の難民の生活を支える貴重な収入源でもある。厳しい生活をしのぐために布を手にする女性たちは、一針一針に故郷の村への想いを込めているのかもしれない。

衣装などの手工芸品は「離散」以前の人びとの生活を語る



社会と時代が織りなした ナシ族画家の出現

張雲嶺の絵画を初めて見たのは、一九九〇年。「日本に来た」という電話が突然、雲南の知人からかかってきて、原宿に出かけた。表参道の画廊でナシ族の画家の個展があり、知人は画家に同行して来たのだという。日本で雲南の画家の個展というのは初めて聞く。一体、どんな絵なのだろうかと思われた。

絵を見て驚いた。彼の作品群は、ナシ族の宗教的職能者が伝承してきた「トンパ文字」を絵の造形表現に取り込み、独特の詩情を醸し出していた。強烈にナシ族を感じさせる一方で、それまでよく見ていた「少数民族を描いた絵」、つまり民族衣装や時に女性の細い腰を強調したりするような絵に見られる、一種のエキゾチズムとは一線を画していた。六月二三日まで民博で開催する企画展「ナシ族画家が描く生活世界―雲南省西北部ではぐくまれた絵心―」は、この張雲嶺と張春亭という画家の作品を取り上げている。



「ナシ古画 祭りの楽しさ〜冬の情景〜」
張雲嶺 2002年 標本番号H0237930
冬は歌い、踊り、飲み、楽しむ季節。恋の歌を響かせる笛の音に、二人の女性も山の動物たちも聞きほれる。頭にとさかのようものが付くのは女性、三つに分かれた帽子のようものが付くのは男性をあらわすトンパ文字



「ナシ古画 狩猟の季節〜夏の情景〜」
張雲嶺 2002年 標本番号H0237928
夏になると人々は農作業の合間に放牧や狩猟に出かける。描かれている3人に特徴的な目は、トンパ文字で「見る」を意味する文字。画家は眼光を誇張したこの表現を好んで使う

「しっかり勉強するんだよ」
張春亭 2003年 標本番号H0237951
町の市場に物売りにきた夫婦。まっさきに店先の公衆電話に向い、妻が話す声が画家に聞こえた。相手は、親と離れ、学校で学ぶ子ども。学費の仕送りの遅れを詫言る母親に、奨学金がもらえたから心配しないでと子どもは告げた。涙を流しながら母親は言った―「しっかり勉強するんだよ」



「兄と弟」 張春亭 2005年
標本番号H0237948
婚礼に着ていく服がなく、兄弟で一枚のシャツを交替で着て、ご馳走の席に出た幼い頃の画家自身の思い出



横山廣子
よこやまひろこ
民博 民族社会学研究所
専門は文化人類学。中国雲南省と隣接する地域に住む人々の社会組織、文化変化、民族意識、民族間関係などを研究してきた。社会環境と個人の意識や行動との関係に興味がある。

文化大革命期に始まる 画家への道

二人が物心ついた頃の中国は、人民公社化に突き進んでいた。「トンパ」と呼ばれる人々がとりおこなうナシ族の宗教儀式は、迷信のレッテルを貼られ、衰退の一途をたどった。他方、少数民族が伝承してきた文化は「民族研究」の対象となり、六六年から始まる文化大革命の一〇年間は中断したが、調査や整理が進められた。こういった社会状況は、二人が画家となっていく道をかたちづくれた。文革時代末期、両者はそれぞれ絵の腕前を磨く場を得ることになる。七四年に中学を卒業し、家で農業をしていた張春亭は、共産党の宣伝のために絵を描く役割を村から与えられた。「プロパガンダ絵画」を量産したのである。他方、高卒の張雲嶺は知識青年として農村に住んでいた。麗江で開かれていた「工農兵美術クラス」には参加資格がなかったが、

内外からの旅行者の増大につれて、作品の購買者は徐々に増え、近年、画家としての地歩は一層固まりつつあるように見える。

こうしてみると、二人の画家の出現には、それぞれの才能や努力が下地にあるとはいえ、画家としての技能や個性を磨く機会や画家として生きる居場所を与えている社会や時代の関与があるように思われる。周囲の人々から画家として認められる人間は、いつの時代にも、またどこの社会にでも存在しているわけではない。

トンパ經典
標本番号
H0237785
トンパによる儀礼が衰退したのにもない、經典も散逸してしまっただけで制作している地域もある



トンパが經典を書くのに使う手製の竹筆。細竹でつくる。張雲嶺も自分で竹筆をつくり、それで輪郭線を描く(個人蔵)



民族文化・観光・画業の確立
天安門事件をはさんで中国が経済発展のギアを入れなおした八〇年代末から九〇年代初め、二人にも変化

張雲嶺は八八年の雲南民族芸術祭期間中に昆明で開いた個展が国内外の来場者の評判になり、日本に招かれ、彼を認めた雲南民族博物館長の支援を受けるようになる。その後、九五年に職を麗江から昆明の民族博物館に移し、画業に専念できる環境を得る。
張春亭は、九〇年に映画館が麗江県の映画会社に売却されたのを機に農村に戻る。その後、漢字の字句を

張雲嶺は八八年の雲南民族芸術祭期間中に昆明で開いた個展が国内外の来場者の評判になり、日本に招かれ、彼を認めた雲南民族博物館長の支援を受けるようになる。その後、九五年に職を麗江から昆明の民族博物館に移し、画業に専念できる環境を得る。
張春亭は、九〇年に映画館が麗江県の映画会社に売却されたのを機に農村に戻る。その後、漢字の字句を



神奈川県立地球市民かながわプラザ・あーすぶらざ

手づくりの温かさで 現代世界を伝え、考える

子どもたちの感性を育てながら、国際理解教育を実践。
しかも楽しく、わかりやすく。そんなミュージアムを訪ねた



本郷台駅近くにあるあーすぶらざ(提供・あーすぶらざ)

「地球の広場」がある。ここは二階に位置し、常設展示室へはエレベータで最上階の五階まで上がる。常設展示は、想像力を掻きたて感性を育むための「子どもファンタジー展示室」、世界各地の暮らしを生活道具や楽器、衣装などをとおして紹介する「子どもの国際理解展示室」、日本が経験した戦争や、紛争・貧困・環境といった地球規模の現代的課題について考える「国際平和展示室」の三室から構成されている。



毎月のワールドカルチャー・デイは、世界各地の出身者の話を聞きながらの交流が楽しい

JR根岸線本郷台駅のホームに降り立つと、SF映画に登場しそうな近未来的な建物が、東側に近接して見える。「あーすぶらざ」の愛称で親しまれている「地球市民かながわプラザ」である。ここで働く友人が関わった企画展の見学のため、今回初めて訪れたのだが、せっかくだからとその友人が施設内を案内してくれた。

展示場は国際交流の場

緩やかな傾斜のアプローチから建物内に入ると、吹き抜けのアトリウ

ムを駆け、これから始まるイベントの準備にせわしく働くボランティア・スタッフと言葉を交わしながら、展示物の位置を直していく。ボランティア・スタッフも準備の手をしばし休め、来館者に笑顔で話しかけている。三階の企画展示室で開催されている「地球の食卓 写真展」の準備は、キャプションの作成・取付けから照明の調整まで、ほとんどがスタッフによる「手づくり」だと友人は再三言うが、「手づくり」だからこそその温かさが展示だけでなく、スタッフ

の入館者への接し方から伝わってくる。それはまた、フードマイレージに関するワークショップ、各国の料理セミナー、食材の生産から消費までを考える講演会や映画会など、多彩な関連イベントの企画や運営にも感じられる。

外へと拡がる活動

あーすぶらざは、「子どもの豊かな感性の育成」「地球市民意識の醸成」「国際活動の支援」の三つを目標に掲げ、展示室以外にも、三六五

の民族衣装で話に聞き入っている子どもたちの姿もあった。

お互いの手の温もり

友人は、ネパールの「アニサちゃんの家」に入って遊ぶ小学生三人組に

席のプラザホール、映像ホール、国際理解や国際協力などに関する雑誌や資料が閲覧できる情報フォーラム、映像ライブラリー、料理室などの館内施設を活用した活動も盛んだ。さらに、そうした活動やリソースを生かし、県内の学校での「学び」に上なる「かべ新聞」の制作・配布、アウトリーチ事業としての出前ワークショップなど、外に向けての活動も積極的に展開している。未来の建物のなかでは、さまざまな「手づくり」の企画が次から次へと生まれている。

表紙モノ語り

ラクダの道具と装具

ラクダ用装身具 (標本番号H229042) など

● 上羽 陽子

民博 文化資源研究センター

専門は民族芸術学、染織研究。インドを中心に牧畜を生業とする人びとの染織に関わるものづくりについて研究をしている。



あーすキャラバン隊は県内の学校で出前ワークショップをおこなう(提供・あーすぶらざ)

ラクダは乾燥地帯を移動する人びとにとって、重要な動物である。自動車やトラックが登場する以前において、ラクダは運送用家畜として大切な役割をはたしてきた。人はラクダに乗るため、ラクダに荷物をのせるため、大事なラクダを飾るため、さまざまな道具や装具を用いてきた。ここで紹介するラクダの道具と装具は、ヨルダン南部にくらすアラブ系遊牧民ベドウィンたちが使っていたものである。まず、荷物を運ぶための道具として、「振り分け袋」がある。振り分け袋は、ヒツジやヤギの毛を紡いで糸にして織られたものである。大きさや色、房の長さなどはつくり手によってさまざまである

が、鞍の上から振り分けるようにかけ、左右の袋に荷物を入れて使用する。装飾としての房飾りは、四つ編みや糸を巻き付けるコイリング技法、または巧みに糸を撚り合わせて丁寧につくられている。ラクダの尻尾部分を覆う、「後部覆い布」も同様に、家畜の毛を用いて織られている。

男性は移動するとき、ラクダの鞍の上にまたがり、片足を鞍の前方部分の取っ手に引っかけ、ラクダは歩く時に前後に揺れるため、想像以上に乗り心地の悪い動物である。しかし、ベドウィンの男性は、片足を鞍の取っ手に引っかけただけで、両手を離してもバランスよく乗り続けている。この時に

足が当たる部分に革製の「足あて」を使用する。

これらの道具と装具は、今春リ



ニューアールをした西アジア展示場で、再現展示としてラクダの模型の上に取り付けられている。また、これら以外にも、「腹帯」や「くつわ」などラクダにまつわる資料が展示されている。さらに、来館者がラクダの前を通る時、鳴き声が聞こえるという工夫も施されている。ぜひ、展示場に足をお運びいただき、ラクダの声を聞きながらじっくり道具や装具をみていただきたい。

はぐしいきお
林 勲男

民博 民族社会研究部

専門は社会人類学。近年は自然災害被災地の復興過程や防災活動について、オセアニア、東南アジア、アメリカ合衆国、日本で研究している。

特別展

千家十職
X
みんなく
—茶の湯のものづくり
と世界のわざ

会期 六月二日(火)まで
会場 特別展示場

◆関連イベント
◆樂吉左衛門氏講演会
民博と私
—このたびのコレボレー
ション展について—

日時 五月三日(日・祝) 一三時
～一四時三〇分まで(開場二二
時三〇分)

会場 講堂(定員四五〇名)
参加費 無料・先着順

◆竹製田舎体験型ワークショップ
伝承技術と文化

〈竹で工芸品づくり〉
日時 五月六日(水・祝) 一三時
三〇分
参加費 三三〇円
定員 三〇名(事前申込制)

〈竹で楽器づくり〉
五月七日(日) 一三時三〇分
参加費 三三〇円
定員 三〇名(事前申込制)

〈わくわくお茶ワークショップ〉
五月二四日(日) 一一時
参加費 三三〇円
〈アフリカのおはなしと
音楽ワークショップ〉
五月二日(日) 一三時～一五
時

会場 自然文化園 平和のバラ
園北側周辺

●MMP企画
◆料理の中の動詞
実施日 五月一六日(土)・二四
日(日)

会場 特別展示場二階
◆茶室の起こし絵図を
作るぞ!

実施日 五月一七日(日)

会場 特別展示場二階
定員 各回五名(当日受付先着順)

◆親子の茶道教室
実施日 五月二〇日(土)

会場 第七セミナー室
参加費 三〇〇円
定員 各回八名(事前申し込み
優先・先着順)

問い合わせ 情報企画課情報企画係
電話 〇六・六八七八・八五三二
(平日九時～一七時)

企画展

「ナシ族画家が描く生
活世界—雲南省西北部
ではぐくまれた絵心—」

会期 六月二三日(火)まで
会場 常設展示場内

*研究者によるギャラリートー
クとワークショップ「トンパ文
字de書」を開催します。

「チベット・ポン教の
神がみ」

会期 七月二日(火)まで
会場 常設展示場内

第四回人類学関連学会
協議会合同シンポジウム
「飽くなき食への希求を
めぐって」

人類学関連学会協議会に参
加している各学会からパネリ
ストを募り、人類の飽くなき食
への希求をめぐって、それぞ
れの学問領域からアプローチす
る。基層的な個体の次元からグ
ローバルな社会の次元まで、多
様な考えを述べあい、学際的な
接続を試みたい。

日時 五月九日(金) 一三時
三〇分～一七時五分(開場二三時)

会場 講堂(定員四五〇名)
参加費 無料・先着順

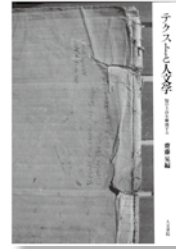
問い合わせ 広報企画室企画連
携係
電話 〇六・六八七八・八二〇
(平日九時～一七時)

●外国人研究員の紹介
GARFAS, Robert
(ガルフィアス・ロベルト)氏
カリフォルニア大学アーヴ
アイン校人類学教授。研究
課題は「音楽展示の方法に関
する研究」。

期間 三月二四日～六月三〇日

刊行物紹介

■齋藤晃 編
『テキストと人文学
—知の土台を解剖する』
人文書院 定価:3,360円(税込)
書物や文書や図面を知的活動を支援す
る道具とみなし、人間とそれらの道具と
の関係を時代
や地域を横断
して総合的に
究明するため
の枠組みを構
築する。人文
諸科学の学際
的協働の成果。



■山中由里子 著
『アレクサンドロス変相
—古代から中世イスラームへ—』
名古屋大学出版会 定価:8,820円(税込)
大王が征服した広大な地域に流布した
伝承を、宗教・政治・歴史の分野にわた
って、アラブ・ペルシアの多様なテクス
トにたどり、語りや図像の担い手たちが
求めた「真実」に迫る。アレクサンドロス
が内包する本
質と、古代世
界の遺産を受
けいれ再解釈
していくムス
リムの精神史
を浮かび上
がらせた力作。



■小長谷有紀 編
『昔ばなしで親しむ環境倫理
—エコロジーの心を育む読み聞かせ—』
(新時代教育のツボ選書)
くろしお出版 定価:1,680円(税込)
「昔ばなし」に生きる先人の自然観を子
どもたちに伝え、エコロジーの心を育む
ことを目指した
副読本教材。地
球温暖化やCO2
削減など理科知
識に偏りがちな
環境教育に、古
くて新しい視点
からのアプロ
ーチを提案する。



みんなくゼミナール

会場 国立民族学博物館 講堂
時間 13:30~15:00 (13:00開場)
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料

展示場をご覧になる方は、観覧料が必要
です。

第372回 5月16日(土)
「千家と職方」【特別展関連】

講師 筒井紘一(財団法人 今日庵茶
道資料館副館長)

茶匠の美意識を受けて職人が道具を
製作するというパターンがはじま
ったのが桃山時代です。利休と樂長次
郎、盛阿弥、辻与次郎、宗四郎など
との関係がそれにあたります。その関係
が定着したのが、千家の歴史と現在の十
職といわれる職人集団。そうした関係
の歴史的展開を考えてみます。



『茶道具定価段附』
安永九年(一七八〇)上・下二冊

第373回 6月20日(土)
「辺境のキリスト教美術をたず
ね—南米イエズス会ミッシ
ョンの聖堂装飾」

講師 齋藤晃(先端人類学研究部准教授)

スペイン統治時代、南米の辺境地域に
イエズス会が建設したキリスト教聖
堂の現状を紹介します。また、イエズ
ス会の宣教師と先住民が、感覚に訴え
る美術の力をめぐって交渉を繰り返
したことについてお話します。



友の会

友の会講演会 会場●国立民族学博物館 第5セミナー室
定員●96名(先着順、申込不要、当日会員証をご提示ください)

第372回 6月6日(土)

時間●14:00~15:30 (13:30開場)
企画展「チベット ポン教の神がみ」関連
ポン教とチベット仏教

講師 立川武蔵(愛知学院大学教授・
民博名誉教授)
ポン教がどのような宗教かを説明する
のは容易ではありません。仏教と驚く
ほどの類似性を示しながら、独自の特
質ももちつけています。ポン教の歴史
とチベット仏教との関係など、ポン
教のさまざまな要素を解説します。

第74回 民族学研修の旅

食は全州にあり
—韓国の食文化体験

期間●6月13日(土)~15日(月)
ビビンバの本場として知られる全州を
訪問します。地元の人びとがかよう朝
市や、朝鮮人参の市場なども見学しま
す。また、伝統的な家屋を復元した宿泊
施設に1泊します。締め切りまであと
わずかです。お問い合わせは右記まで。

第373回 7月4日(土)

時間●14:00~15:30 (13:30開場)
シリーズ「先住民のいま」①
狩猟採集は「先住民」の権利か?
—アフリカにて

講師 池谷和信(民族社会研究部教授)
新シリーズでは、長年、先住民社会に関
わってきた研究者を講師に、「先住民」
をめぐる最新の動向や、歴史的経緯を
ふまえた各地域の現況をとりあげま
す。今回は、サン(ブッシュマン)の人び
とが関わった裁判を事例に、世界的な
ネットワークのなかですむ先住民運
動についてお話いただきます。

国立民族学博物館 友の会

電話 06-6877-8893
ファックス 06-6878-3716
電話でのお問い合わせは
月曜~金曜日午前9時から17時まで
にお願いします。
<http://www.senri-f.or.jp/>
E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

ミュージアム・ショップ

常設展示場で開催中の、企画展「チベ
ット ポン教の神がみ」にちなみ、本館
ミュージアム・ショップでは、チベ
ット文化域広範にわたり分布している
ポン教と、それとたがいに影響をおよ
ぼしあってきたチベット仏教に関連
した商品を取り揃えました。人びとの
祈りの心から生まれた品々を是非手
に取ってご覧ください。



チベット仏教関連商品【心に響く美しい
音色のティンシャー(4,200円)、マニ車
(5,250円)、法具 かつ摩(17,850円)】

国立民族学博物館 ミュージアム・ショップ

電話 06-6876-3112
ファックス 06-6876-0875
水曜日定休
ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ「World Wide Bazaar」
<http://www.senri-f.or.jp/shop/>
E-mail shop@senri-f.or.jp



ポン教関連商品【声明を取めたCD
(2,625円)、カラフルに刺繍されたお守
り(大1,260円、小525円)】

ベドウィンのテントで明かした夜

リニューアされた西アジア常設展には、ベドウィン（遊牧民）のテントが再現されている。その展示の準備をしながら、一五年ほど前にイスラエル南部ネゲブ地方にあるベングリオン大学のステボケル・キャンパスで開催された、ベドウィンの文化・歴史・言語に関する夏季講座に参加したことを思い出していた。

●ネゲブの砂漠研究所

講座が開かれたキャンパスは、テルアビブからバスで二時間ほど南に下ったベルシェバからさらにバスで一時間、ベドウィンのテントが所々に立ち並ぶ以外ほとんど何も見当たらない荒野を南下したところに、まさにオアシスのように現れる。

その敷地内にブラウシユタイン砂漠研究所があり、イスラエルの領土の五〇パーセント以上をも占める砂漠地帯の有効利用のためのさまざまな研究がおこなわれていた。そのほとんどが理工学系であったが、その中で当時、唯一の人文社会学系の研究ユニットであった社会学センターがベドウィン夏季講座を主催した。

このセンターはネゲブ地方に約八万人いるとされたベドウィンの調査をおこなっていた。これは民族学や

言語学等の分野における成果をあげるためだけでなく、イスラエルの領土となった地に生活するベドウィンたちが抱える諸々の問題（土地の所有権、定住化、教育、医療等）の現状を調べるためのものでもあった。ヒツジやラクダを連れて自由に移動してきた——イスラエル政府にとっては少々厄介な存在である——ベドウィンを管理するために必要なデータを集めるという極めて政治的な意図を持っていたようだ。

電気やガスを使わない冷房システムを導入した、まるで火星基地のような建物の中で講義がおこなわれ、週に一度はフィールドに出た。世界的な権威が集められた講師陣に学ぶ、大変恵まれた機会ではあったのだが、週に一度だけの集団フィールドワークでは飽き足らず、キャンパスで知り合った人のついで、個人的にベドウィン老夫婦のテントを訪れ、夜を過ごすことにした。

●原野を体験

もちろん電気などひかれていないわけがない。老婆が焚き火で料理してくれたこった煮は、暗くて中身が見えない。ほとんど手探りで、それを薄いパンといっしょに食べた後、お

茶がふるまわれた。口をつけたコップのふちに、かたい異物の感触があり、焚き火の明かりにかざして見ると、なんと巨大なアリが。砂糖がたんと入ったお茶を吸ってたつぷりと膨らんだ腹が、炎のゆらめきの中で鉛色に透き通っている。「この茶は私にも飲む権利がある」といわんばかりに、堂々と触覚を震わす様子に一瞬ひるんだが、ごめんよと爪で弾きとばして、残りの茶を



ネゲブのベドウィン(1993年夏)

山中由里子
民博 民族文化研究部
専門は比較文学比較文化。アレクサンドロス大王の死後に彼にまつわる様々な言説が、古代ギリシア・ローマ世界からイスラーム世界へどのように伝わり、展開したかを研究している。著書に『アレクサンドロス変相 古代から中世イスラームへ』(名古屋大学出版会、2009年)。

俳優デヴィッド・ガルピリルのダンス

オーストラリアで製作された映画のなかで、日本では一九八七年に上映された『クロコダイルダンディー』は、気楽に観ることのできる楽しいお話だった。だが二〇〇三年二月に公開された『裸足の一五〇〇マイル』と、二〇〇九年二月末からロードショウがはじまった



市立博物館館長の「オーストラリア・アボリジニの文化」と題する講演につづいて、「歓迎の歌」から「白いオウム」に「カンガルー」、そして「フクロウ」にいたるまで三人のダンサーとともに一曲の歌と踊りを披露してくれた。それは『クロコダイル・ダンディー』の公開より少し前のこと



『オーストラリア』とは、それぞれの時代のオーストラリア事情やアボリジナル政策を背景にしているだけに、いろいろと考えさせられる映画だった。

●民博ではアボリジナル・ダンスとして公演

そのいずれにも登場するアボリジナルの俳優が、デヴィッド・ガルピリルである。彼は一九七〇年の大阪万博にアボリジナル・ダンサーとして来日したところから、映画スターの道を歩みはじめていた。その彼を国立民族学博物館は一九八五年六月一五日に、「ラマンガニング・ダンスグループ」のリーダーとして招聘した。それは「科学万博—つくば85」(国際科学技術博覧会)での六月一八日のオース

だった。

●五〇歳をこえて磨きがかかる

その後デヴィッドが出演する映画で私が観たのは、一九三一年のオーストラリアを舞台にした『裸足の一五〇〇マイル』だった。この映画で彼は、収容施設を脱走した三人の少女を追跡するアボリジナル・トラッカーに扮していた。この時期のトラッカーは、辺境に逃げ込んだ犯罪者

などを足跡から特定して追跡する警察の一員で、その隊員のほとんどがアボリジナルであった。

また一九三九年ころから四〇年代前半の北オーストラリアを描いた映画『オーストラリア』では、デヴィッドは超自然的な能力をもつ呪術師

であり、アボリジナルとヨーロッパ人とのあいだに生まれた孫ナラの守護者として登場する。それは五〇歳をこえ年長者となった彼の風貌にぴったりの役柄であった。こうしてデヴィッド・ガルピリルは、それぞれの時代を生きたアボリジナルを演じる。その彼と国立民族学博物館は、はやい時期からつながりをもっていたのである。

上：ステージにそろうダンスグループ。右から2人目がデヴィッド・ガルピリル
下：躍動感あふれるデヴィッドのダンス

松山利夫

まつやま としお

民博 民族文化研究部

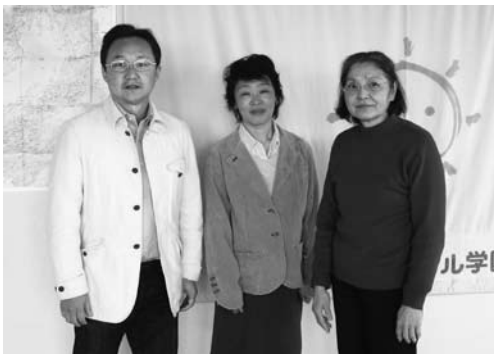
専攻は文化人類学。一九八〇年代初めよりオーストラリア先住民研究に従事。編著書に『ブラツクフェラウェイ オーストラリア先住民アボリジナルの選択』(御茶の水書房、二〇〇六)ほか多数

多文化を	ささえる	人びと
------	------	-----

子どもたちの小世界 ブラジル人学校のいま

一時は九〇校にも達したブラジル人学校はいま窮地に立たされている。昨年末からの経済不況のあおりで学校に行けない子どもが増えているためである。ブラジル人の子どもたちが生活の中心であった学校からきりはなされ、行き場のない空虚な時間を過ごすことを余儀なく、必死で子どもたちを守ろうとする人びともいる。

ブラジル人学校ということばを聞いたのは一〇年ほど前であった。確かに日系ブラジル人が一九九〇年代に増加をはじめ、労働者として各地で集住地を形成していることは知ってはいた。しかし、そういう彼らが同伴した子どもたちの学校を設立したという情報は、私には唐突で、自分の移民問題についての不勉強を



左から渡守さん、教師のナカザワさん、園長のサトウさん。後ろはアジア・ブラジル学園旗

実感した一瞬であった。当時、まだ数か所といわれていたブラジル人学校はその後、情報が入るたびに一〇校、三〇校と増加し、最終的には九〇校にまで達したといううわさも届いた。

滋賀県のブラジル人学校

やがて、そのような学校が滋賀県にもできたと耳にした。関東や東海地方にくらべてブラジル人が比較的小なかつた関西にも、彼らが定着しはじめたことと表れであった。そして三年前の二〇〇六年、ようやく私が訪問する機会をえたサトウ学園も、そのような学校のひとつであった。琵琶湖南部、幹線道路沿いの自動車関連工場と畑に挟まれた二階建てプレハブ校舎には、学年別クラスと数十人の子どもたちがひしめきあっていた。かつて訪れたことのある群馬県のブラジル人学校とほとんどかわらない雰囲気漂っていた。

子どもたちの快活さ、ポルトガル語とブラジル方式で運営されるクラスに妙な解放感を覚え、私自身はまだ知らぬブラジル文化の一端を体験した気分になった。サトウ・ミドリ園長が七人の先生とともに立ち上げたばかりのサトウ学園には元気があふれていた。

しかし、そのサトウ学園は、いまはもう存在しない。流動性の高い労働市場とともにブラジル人は頻繁に移動し、親が四万円余りの学費を払えず通学を中断せざるをえない子どもたちも多い。制度的に私塾扱いのため、自治体の援助や免税措置もないブラジル人学校は恒常的に不安定な経済基盤にあるのだ。

ブラジル人学校の試練

ところが、サトウ学園は実質的にはなくなっていなかった。昨二〇〇八年の春、経営が行き詰まったサトウ学園は、それほど遠くないところ

しょうじひろし
庄司博史
民博民族社会研究部

言語学・言語政策論。2004年に特別展「多文化共生」を企画した。近年は移民言語や多民族化の諸現象に関心をもっている。共編著書に『多文化共生「ニホン」(2004年)、『日本の言語景観』(2009年)など。

で、「アジア・ブラジル学園」として存続していた。サトウさんも園長として働いていた。

経営を引きついでのは渡守貴之さんである。渡守さんは日系ブラジル人ではない。十数年来、ブラジル人の人材派遣業に携わっていたことから、子どもたちの学びの場を確保しようとして事業を引き受けたのだ。渡守さんは、かつてある事業者が潰れ工場をブラジル学校用に改築しようとしたものの、中断したままになっていた二階建ての建物を借り上げた。

二階には、いくつもの教室にくわえ図書室、音楽室、食堂、それにパソコン・ルームなども備えた。保育児もいれると八〇名もの子どもたちがここに通り、遠方からも何台もの車が子どもたちを送迎するほどであった。子どもたちを朝から晩まであずかるブラジル人学校は、教育の場であるばかりか、子どもたちには生活の中心であり唯一の世界であった。

親たちも学校のさまざまな行事に参加し、経営面でも順調にすすむかみえた。

子どものいない教室が、そのすべてを物語っていた。

子どもたちのために

ポルトガル語のみで、ブラジルのカリキュラムにしたがうブラジル人学校のあり方にはさまざまな意見がある。各地の集住地域で自己完結型のコミュニティを形成し、日本社会から距離をおきがちのブラジル人は、日本語学習や情報の面で自らの可能性をせばめているという指摘も存在する。その一方で、同化的で画一的な日本の学校になじめず、いつの日か帰国する可能性を信じて子どもたちにポルトガル語とブラジルの文化を身につけさせたいと考える親も少なくない。日本の学校でことばや文化摩擦、時にはじめでなやむことより、多少無理をしてもブラジル人学校で子どもを自由にそだてたいと思うのも無理はない。



去年までのクラスの子どもたちの多くは転出してしまった

私がアジア・ブラジル学園を訪れた日、渡守さんは朝から県の国際課の担当者と窮地にある滋賀県内の四つのブラジル人学校への援助折衝に奔走していた。自治体、教育委員会、メディアに、一人でも多くの子どもたちが一日でも長く学校にとどまれるよう訴え続けている。



カリキュラムはほぼブラジルの学校にそっている

ご本人に人権問題の関心があったとはいえず、私財をなげうってまで外国人の教育問題に関わるとは思っていないかつたはずだ。派遣業のため、「営利目的と勘ぐられるのが口惜しい」という。それでもようやく、自治体から給食費と施設費の援助がうけられそうな気配だ。半年もの学校生活の空白は、子どもたちの心と学力にどれほど大きな

ポルトガル語の教科書を広げる子ども



子どもたちの多くは日本語がほとんどできず、日本の子どもと遊ぶ機会ほとんどない

負担をのこすだろうか。どんな事情にせよ、行き場のない子どもたちには罪はない。「しかし、子どもたちにとっては、いまが非常事態なので、そういう渡守さんのことばと、ポルトガル語で教科書の内容を懸命に説明しようとしてくれた子どもたちの明るい表情が、帰路については私の脳裏に、幾度も交互に浮かんで消えた。

マオ・グアは母の味

米どころの中国雲南省に暮らすミャオ族の主食は、マオ・グアと呼ばれるトウモロコシのごはんである。彼らが居住する標高が高く水の少ない土地は、稲作にむかないからだ。トウモロコシはミャオ族の様々な生活場面で無駄なく使用されるが、中でもマオ・グアは最も身近で重要な生活の糧となっている



碗によったマオ・グア

ミャオ族の居住地には平地や傾斜地を問わずトウモロコシ畑が広がる。多くが小麦との二毛作で、旧正月前後に小麦の収穫を終え、牛で畑を耕し、春の雨が降る四月頃に播種する。八月には若いものが収穫できるが、本格的な収穫は実が完熟してプラスチックのように硬くなった十月頃である。

トウモロコシのごはんマオ・グアに用いられるのはモチ種のトウモロコシである。モチトウモロコシは、八月の柔らかいものを茹でたり焼いたりするとモチモチしており、噛むほどにしんわりと甘みを感じる。この時期のモチトウモロコシを製粉して水と混ぜ、表皮に包んで蒸しあげるとパオグ・ツヤという団子は、一年に一度の味だ。十月には家を埋め尽くすほど大量に収穫し、表皮を剥がし脱粒して、マオ・グアや家畜の飼料として日常的に使用する。

トウモロコシのごはん

マオ・グアを作るにはまずモチトウモロコシを、以前は石臼で、現在は電動の機械で製粉する。一回に蒸す量は、直径二十センチほどの柄杓に山盛り一杯程度である。それを目の細かいザルにのせ、水を加えながらタマにならないよう両手のひらをこすり合わせながら混ぜる。それを木製の蒸し器にいれ、湯を張った大鍋に置き、強火で蒸す。五分ほど蒸したら再びザルにあげ、少しずつ水を加えながら空気を含ませるように手で混ぜ、目の粗いザルでふるう。再度蒸し器にいれ、十分ほど蒸せば出来上がる。これを各自碗によそい、米飯と同じ要領で主食として食べる。



1年に1度の新しいモチトウモロコシでつくる蒸し団子

マオ・グアを蒸しているかまどの様子



り食べ難い。周囲の人々が早々と数杯食べ終わっても、私は一杯を食べるのがやっとだった。彼らは、外から来た人がマオ・グアを喜ばないことを知っている。私にも何度も「マオ・グアは食べられるのか？」と聞いてきた。自嘲気味に「マオ・グアは不味いからね」と言う人さえいた。

新年や結婚式には米を食べるが、トウモロコシの売値の三、四倍する米を購入することはまだまだ容易ではない。マオ・グアを食べている自分たちは貧しいという意識もあるのだろう。

それでもマオ・グアはミャオ族にとって最も慣れ親しんだ味であることは間違いない。老人は米よりもマオ・グアを好む傾向にあるし、長く出稼ぎに行っている若者も時折マオ・グアを懐かしむという。女性が丹念に手で混ぜる様子を見ながら、私は日本の母が手で握るおにぎりに通じるものを感じた。徐々にマオ・グアに慣れてきた私に、村の人々が「あの子もマオ・グア食べられるんだね」とコソコソと話しているのを何度か耳にした。そういう時、私の村の母は、少し誇らしげな顔をする



トウモロコシ

学名：Zea mays

イネ科の一年生植物。人間の食料や家畜の飼料として利用される。中国には16世紀ごろに伝わった。モチ種のトウモロコシには、黄、白、赤紫などの色がある。マオ・グアに使われるのは、黄色と白色のもので、白色のほうがきめが細かく滑らかな食感である。トウモロコシの茎や表皮は牛の飼料に、実をとったあとの軸や干した茎はかまどの燃料にと、ミャオ族の生活において無駄なく使用される。

のである。マオ・グアに慣れることはミャオ族の母の味を覚えることなのだ。



一度蒸し終えてザルに出した状態



水を加えて手のひらでこすり合わせながら混ぜる

みやわき ちえ
宮脇千絵
総合研究大学院大学
文化科学研究科博士課程
専門は文化人類学。ミャオ族の服飾について、デザインや装い方の変化が、中国における少数民族の生活の変化といかに関わりあっていたのかを、雲南省を中心とした地域の調査に基づき研究を行っている。

近江の春は、私には祭りの季節というイメージがある。関西に居を移して一〇年以上たつが、それ以前も四月から五月の連休前後はたびたび近江に足を運び、方ほうの祭りを見物していた。さしずめ、四月中旬の長浜の曳山祭りあたりは早いほうになるだろうか。しかし、この祭りは湖北というところもあり、陽が傾くと急に気温が下がってきて、のんびり祭り見物どころではなくなる。それに比べて、四月末から五月初旬の連休の頃になるとすっかり陽気もよくなり、とくに晴れたりすると、祭り見物にはほんとうにいい季節となる。

実際の祭りも、気分が浮き立つ華やかなものが少なくない。蒲生郡竜王町山之上のケンケトや守山市杉江町のサンヤレなど、かぶり物や衣装にさまざまな色彩や意匠を凝らした踊り手が登場するもの、奴振りで有名な甲賀市油日の油日祭りや、一閑張りの鍋釜をかぶった少女が行列する米原市筑摩の鍋冠祭りなど、さま

曳山と風流 春の祭りの民主主義

春の近江を彩る祭りには奇抜で華美なものが多い。平安末期から中世にかけてはじまる美意識の系譜に連なるものだが、伝統と格式を誇るものではない。様式を固定化させるのではなく、新たな趣向を凝らすところに個性が生まれる。祭りを自由に演出する伝統と近江の人と地域性とは、どこかでつながりがあるのかもしれない



ささはらりょうじ
菅原亮一
民俗文化研究部
専門は、民俗学・民俗芸能研究。最近、九州各地の島々を巡り歩き、祭りや芸能の伝播や定着について考えている。

さまざまな扮装の人びとによる御神幸がおこなわれるものもある。また、長浜の曳山祭り以外にも、伊香郡余呉町の茶碗祭りや高島市勝野の大溝祭りなど、曳山が賑やかな囃子とともに巡行するところも少なくない。

祭りと風流

こうした祭りの踊りや御神幸行列や曳山の巡行には共通して見られる特徴がある。それは「風流」である。

この場合、「ふうりゅう」ではなく「ふりゅう」と読む。「ふうりゅう」というと粋で渋い趣味を連想するが、「ふりゅう」はそれとはまったく異なる。それは、色彩や意匠や動作や音など、さまざまな面で奇抜で派手で華美な趣向を凝らし、いかに人の耳目を集めるか、見物人を驚かせるかを第一とする美意識で、平安末から中世にかけて、祭りにおいて大いに流行した。前述のような、近江の祭

りで踊り手や行列の人びとが奇抜な扮装や動作をするのも、さまざまな彫り物や幕で曳山を飾りたてるのも、囃子を賑やかに奏でるのも、いずれも平安末から中世にかけての風流の美意識の系譜に連なる趣向ということができる。

そんなことをいうと、近江の春の祭りを、平安・中世以来の伝統と格式を誇る日本古来の祭りといったかたちでイメージしそうになるが、必

ずしもそれは適当ではない。「伝統」や「格式」といった言葉から想起される物事のありようの固定化は、そもそも風流の発想からはもつとも遠い。中世の風流の祭りのようすを見てみると、人びとはその時々々の流行の風俗や音曲などを貪欲に取り入れて、競い合って趣向を凝らしていた。さらには、再び同じ趣向をおこなうことをいさぎよしとしない一回性が、風流のもつとも重要な眼目とされていたのである。

日野祭りの曳山

しかし実際は、江戸時代になると祭りの風流は名ばかりとなるところが増え、趣向がすっかり固定化して、それが現代に伝わっている場合も多い。それでも、風流の美意識や精神が感じられる祭りが無いわけではない。やはり近江の春の祭りである、蒲生郡日野町の馬見岡綿向神社で五月二日から三日にかけておこなわれる日野祭りはそんな祭りの一つである。

三日の本祭りでは、紋付き羽織袴姿の田楽座の人びとに守られた神子に先導されて、三基の御輿と一六基の曳山が神社から御旅所に巡行して戻る。曳山は、古いもので二〇〇年、新しいものでも百数十年たつとされ、見事な飾り金具や見送幕で飾られた漆塗りの豪華なもので、それだけでも目を引くが、私が注目したのは、



2008年の日野祭りには、北京オリンピックの日本代表選手を励ます作り物が選ばれた

曳山の屋上に飾られた作り物である。この作り物は「ダシ」と呼ばれ、それぞれの曳山を出す町内の人びとが毎年趣向を考えて作る。「源義経」や「浦島太郎」といった昔からある古典的な題材の作り物がある一方、

その時々々の時事的な話題を作ったのせるところもある。わたしが以前見に行ったときは、大リーグのユニフォームを着たイチローがのっていた記憶があるので、二〇〇一年ということになる。昨年久しぶりに見に行

その時々々に何に対して興味関心を抱き、何を考えているかがよく表れている。それらは素人が作ったものなので、技術的に高い水準に達しているとはいえないし、選んだ題材も、どちらかといえばステレオ・タイプであることは否めない。しかし、この祭りでは、作り物の趣向を、とにもかくにも祭りに関わる人びとと自ら毎年選んで自由に更新しているとすれば、そういうやり方は、祭りに参加する人びとの主体性が基本となっていると見ることもできる。その意味で、ある種の民主主義であり、一部の階層が特権的に差配して古来の格式を遵守しておこなわれていた堅苦しい祭りよりも、よほど好ましく私には感じられる。

*

つたら、NHKの大河ドラマの主人公の篤姫がのった曳山が複数あった。また、日本代表のユニフォーム姿の野球選手がのっていたものもあった。ブレイクしたタレントや芸人もよくのる題材である。

こうした作り物には、人びとが、

とはいえ、そうした祭りのありようも、決して手放しで礼賛するわけにはいかない。福井県坂井市三国町でおこなわれる三国祭りは巨大な人形の作り物をのせた曳山で知られるが、戦時中の祭りの写真には、巨大な兵隊の作り物をのせた曳山の姿が写っていた。民主主義がポピュリズムに墮してしまうのは、祭りの風流においても例外ではないのかもしれない。

結婚相手を選ぶ術

最近、「婚活」という言葉が流行っているそうである。「就活」が希望の会社に就職しようと会社説明会や面接に参加する就職活動の略語であるように、婚活は結婚に向かって行動することをさす

厚生労働省の人口動態統計によれば、日本人の平均結婚年齢は二〇〇七年で男性三〇・一歳、女性二八・二歳であり、その数字は年々上昇している。未婚率が日本一とされる東京都では、三〇〜三四歳の男性の半数以上、女性の三分の一以上が結婚していないという。それにはいくつもの要因があるだろうが、ひとつと言えることは、いまや結婚は目的意識をもって積極的に行動することが求められる現象となりつつあるということだ。

男性は二六〜二七歳、女性は二二〜二四歳が適齢期

わたしが関わっているインド社会は、こうした結婚活動が盛んに行われているという点においては、日本以上だといえる。依然として見合い結婚が優勢なインドでは、人びとは八方手を尽くして、最もふさわしい



緊張した面持ちの花嫁。インドでは結婚式はたいいてい2〜3日続く

パートナーを見つげようとひっしである。知人や親せきのネットワークはもちろんのこと、結婚相談所や新聞、インターネットも駆使して相手を探す。実際に会う人の数も半端で

はない。一〇人程度ということもあるが、なかには五〇人以上の候補者と会ったという人もいる。わたしの友人男性は現在二六歳、婚活の真つ最中である。彼のところに届いたある女性の「履歴書」を見せてもらおうと、学歴から職歴、相手への希望条件、結婚の抱負までがずらりと並んでおり、まさに就職活動のようであった。

この婚活には、多くは本人ではなく両親のほうで熱心であり、息子や娘の結婚相手にふさわしいと思う候補者の選定にも、家族が大きく関わっているという特徴がある。都市中



結婚式当日の朝、花嫁とその両親が年配女性から祝福を受ける

「いい人がいないから結婚しない」は見られないインド

インドの見合い結婚では、カースト、学歴、経済階層が釣り合っていることが第一条件であるうえに、二人の星回りが占星術的にみて合致するかどうかを気にする家族も多い。これ以外にも、最上位カーストに属するバラモンの家族であれば、二人が属するゴートラとよばれる氏族が異なっていることも条件となり、いさおい、パートナー探しは難航してしまう。

夫には、学歴と収入と背の高い人が良いと願うのは、どこの社会でも同じようである。加えて、最近では女性も親の言いなりではなく、積極的に夫選びに関わるようになり、性格や価値観が合うかどうかにも重視されるようになった。まだまだ自由恋



花嫁の親せきの女性が床に吉祥な模様である卍を描く



結婚式場の入り口に描かれたガネーシャ神の画像。来客を迎える言葉が記されている

愛が一般的ではないインドでは、見合いの場はおおびらに異性と出会うことの出来るチャンスとしても期待されている。

理想の結婚相手を見つめるのはますます難しくなり、それに伴い婚活がますます盛んになるのは、都市であれば日本もインドも変わらない。とはいえ、インドでは「いい人がいないから結婚しない」という選択は、ほとんど想定されていないということが決定的な違いだろう。

花嫁選びが難航する件の友人も、わたしが「そこまでして、なぜ結婚したいの？」と聞くと、本人はその質問に戸惑い、「僕はもう二六歳だし、結婚する年齢だよ」と笑った。婚活にいそしむ人の間でも、「そもそもなぜ結婚したいのか」という問いが発せられることは、ほとんどない。年齢や世代、ジェンダーによって決

儀礼の最後に、花嫁と花婿が布をはさんで向かい合う。正面からはお互いの姿はよく見えない



められた役割や立場が明確で、そのこととくに疑問や矛盾を感じることもなく、反発の余地が少ないということは、わたしには新鮮な驚きだった。このことは、インド社会における女性の性と生殖について研究するわたしの大きな関心事でもある。だが、わたしが驚きを感じるということは、ひいては、ある選択には必ず理由や説明があるはずだという考え方に、調査者であるわたし自身がどっぷりと浸っていることの証でもある。

豊かな選択肢があることの「しんどさ」

日本で未婚率が高まっているのは、

間層の若者の場合では、男性は二六〜二七歳、女性は二二〜二四歳が結婚適齢期とみなされており、子どもがその年齢に近づく親たちは大忙しである。しかし、懸命な婚活にもかかわらず、理想の相手を探し出すことは容易ではない。

現代社会において、すべての選択が何らかの根拠に基づいていることを、自己反省的に問題化し確認するような風潮が広まっていることと無関係ではないだろう。それは、ほかでもない自分が選択した結果の責任は、自分で引き受けなければならぬ、という自己責任の考え方も結びついている。たとえば、結婚相手を選ぶという行為ひとつにも、複数の選択肢のなかから、なぜその選択をするのか、なぜその人でなければいけないのか、という理由が必要となる。だが、納得できる確固たる根拠が見つからなければ、選択そのものが出来なくなるということが起こりえる。「増える未婚」とは、人生における決定的な選択を、未来へ先送りしようとするものだともいえる。

選択肢が増えるということは、確かに望ましいことである。ひとつでも多くの可能性が開かれているということは、肯定されるべきことだろう。そのことを否定するつもりはまったくない。だが、複数化した選択肢を前にして、つねに自己責任のもとで選択と決定を強いられるというのは、少々しんどいことでもなろうか。だからこそ、「二六歳だから結婚する」のであり、それ以上でもそれ以下でもないという人生へのシンプルなお気持ちに、わたしは素直にひきつけられるのかもしれない。

まつおみずほ
松尾瑞穂
民博 外来研究員
日本学術振興会 特別研究員

専門は文化人類学。インド、マハラシュトラ社会における生殖実践とジェンダーについて研究している。現在は生殖医療技術がもたらす身体部品の文化的意味の変容過程に関心を持っている。

編集後記

民博はこれまで幾度も改修を重ねてきたが、今回のリニューアルは、展示レイアウトの変更や展示物の入れ替えという点だけに限られない。より根本的な展示の方針にもメスが入ったのである。まず、従来の展示場の説明文は日本語のみであったが、今回のリニューアルからは、展示の趣旨解説やキャプションの基本情報は英語でも併記することになった。また、以前はビデオテークや電子ガイド以外の場ではあまり使っていなかった映像音響資料も展示の中に積極的に取り込み、モノの背景に息づく人びとの暮らしを伝えるようにした。色や音にあふれた賑やかで、楽しい展示になったと思う。資料の寄贈、情報や画像の提供などにおいて貢献してくださったすべての協力者の方々に感謝したい。

今年度は「音楽」と「言語」の展示を中心に改修が予定されており、秋の終わりのころには長年親しまれた両展示が工事のために閉鎖されることになる。民博の新旧を味わいに、今一度ぜひ足をお運びいただきたい。(山中由里子)

次号の予告

特集 常設展示 リニューアル 〈アフリカ〉

月刊みんぱく
2009年5月号

第33巻第5号通巻第380号 2009年5月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 西尾哲夫

編集委員 久保正敏(編集長) 佐々木史郎 庄司博史
中牧弘允 三尾稔 山中由里子

協力 財団法人 千里文化財団

制作 京都通信社

印刷 市蔵図書

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館企画連携係に
お願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

- 予定時間 14時30分から15時30分(予定)。
- 特別展示場または常設展示場観覧料が必要です。
- *都合により、予定を変更することもあります。

国立民族学博物館(みんぱく)の研究者が、来館された皆様の前に登場し、「研究の内容」、「調査地域・国の最新情報」、「展示資料にまつわる情報」についてお話しします。質問もどんどんお寄せください。展示場でお待ちしています。

5月開催

5月3日(日) ★この日のみ15時から16時(予定)

話者: 三島禎子

(民族社会研究部准教授)

話題: アフリカ経済における
布と商人の役割

場所: アフリカ展示



美しく着飾った少女たち

5月10日(日)

話者: 西尾哲夫

(民族文化研究部教授)

話題: 新しい西アジア展示

場所: 西アジア展示

5月17日(日)

話者: 韓敏 (民族社会研究部准教授)

話題: トランプから見る中国文化のあり方

場所: 中国地域の文化展示

5月24日(日)

話者: 吉田憲司 (文化資源研究センター教授)

話題: 新しいアフリカ展示が出来るまで

場所: アフリカ展示

★5月31日(日)は、文化人類学会のため、お休みします。



交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分(茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停下車で乗るバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください)。
- 自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

